

平成二十九年四月十日発行
皇學館論叢第五十卷第二号 抜刷

丹羽文雄「有情」にみる人間観

——父子間の心の断絶から親鸞への傾斜——

河合重好

丹羽文雄「有情」にみる人間観

——父子間の心の断絶から親鸞への傾斜——

河合重好

□ 要 旨

「有情」は、丹羽文雄の長男直樹の国際結婚を題材に発表されたものであり、自伝性の強い作品である。その文脈は、結婚に反対する父母と結婚を切望する息子との心の断絶と対決をきっかけとして、人間のあやまちとその苦しみからの解放、心に負い目をもつことの危険性を論じたものである。

親子は、最後まで和解することなく、平行線を辿るが、父は、このことが契機となって、はじめて、相手の気持を察することの困難さに直面し、かつて自分が三〇年前、僧職になる約束を破り、小説家になったときの、父や檀家に与えたであろう背信の重さに気づく。そして、親鸞思想に覚醒することにより、煩惱具足の人間が犯す「あやまち」からの心の解放と救いを求める姿が描写されている。

ここには、現代社会に生きる人間として、円滑な人間関係を維持していくために必要な警鐘や教訓が内包されているとの課題設定にたち、本稿は、その解明を試みたものである。

□ キーワード

父子の断絶 背信行為 親鸞 自伝性

はじめに

宗教小説の第一人者と評される丹羽文雄（一九〇四～二〇〇五）（以下、丹羽と表記する）の作品には、作者の熟年期に発表された「浄土真宗もの」といわれる六作品があり、その内訳は、発表年代順に、「青麥」（昭和二八年、文芸春秋新社）、「菩提樹」（昭和三〇年、週刊読売）、「有情」（昭和三七年、新潮）、「一路」（昭和三七年、群像）、「肉親賦」（昭和四四年、群像）、「無慚無愧」（昭和四五年、文学界）となっている。

これら作品は、いずれも寺院と密接な関係をもったものであるが、本稿で取り上げた、昭和三七年発表の第三作である「有情」は日本古来の結婚観が支配的であったと思われる時代のものであり、他作品が、主として、男女の愛欲に伴う人間模様を主題としているのに対し、この作品は、人間のあやまちを主題に、国際結婚にからむ父母と息子の心の断絶が描かれており、父は、その苦悩からの解放を親鸞思想への傾斜に求める姿が語られており、趣を異にしているのが特徴である。

本稿は、いつの世にも共通すると思われる、子に対して実体以上を望む親心と、念仏と情欲というアンビヴァレンスな行動をとる父親に対して、強い反感をもつ子供心との間で生ずる父子間の人間関係の軋轢を背景に、丹羽がどのように作品を展開し、親鸞思想への傾斜に至ったかを、文脈の流れに着目することによって、現代にも通じる警鐘や教訓をくみ取ることを主眼として、考察を試みたものである。

この作品は、丹羽が長男直樹の国際結婚を題材に発表したものであり、限りなく私小説に近い形をとっている。先ず、本稿一章では、丹羽自身の実生活での体験を整理し、その経験が、本稿二章の作品描写に対し、どのように、投

影されているかについて見ていきたい。

一 丹羽のおいたちと私生活における体験

丹羽の作品を展望するとき、特筆すべき最大の特徴は、作品の背景には、丹羽の私生活での体験が深く関与しており、自伝性が極めて強いことである。そのため、最初に、本稿で取りあげた「有情」に直接関係する事柄を中心に、その生い立ちと家庭環境について、『丹羽文雄文藝事典』を参照して、時系列的な経緯に触れておきたい。^①

実父（教開）は、一八九二年（明治二五年）、名古屋から母子家庭であった、真宗高田派末寺である四日市市の崇顕寺へ、二一歳で養子（このとき、生母は一二歳）として入り、寺の再興に貢献したが、一方、性的欲求の強い四十代の祖母の誘惑に負け、不倫関係をもつ。生母は、それを知って、一九〇八年（明治四一年）、文雄が四歳のとき、旅役者を追って家出する。丹羽は、一九〇四年（明治三七年）、崇顕寺の長男として生まれたが、親や檀家の期待に背き、廃嫡されて小説家となった。

なぜ、丹羽が小説家の道を選んだか、その背景について、古市充雄は、四日市高校（旧制富田中学）時代の丹羽自身の言説を、『XYZ235』「四日市の丹羽文雄さんの貌」で、次のように紹介している。^②

「私は作文の時間が好きであった。他の生徒が時間をもてあましているのに、私には時間が足らず休み時間まで綴方を続けていた。いつも私だけがおくられて、出来上がった作文を教員室まで届けた。先生はいちいちいいに批評してくれた。そのことが、今日小説家としての私を育て上げてくれたと思っている」
と述べ、丹羽が天性の才能に恵まれていたことが語られている。

さらに、同書「丹羽文雄論」の中で、麦畑羊一は、物書きとしての才能以外に、丹羽の育った環境の異常について、次のように言及している。^⑤

本来は父の跡を継いで僧侶になるために、高校（四日市高校）から仏教系の大学に進学するべきところであったが、丹羽はすでに文学者を志望していたため、父や檀家には仏教に関連の深い哲学科に進学するためと偽って、早稲田高等学院から早稲田大学文学部国文科に進んだ。

（中略）

卒業後、仕送りを停止された丹羽は、生計を維持するため四日市に戻り、東京で同棲していた女性（片岡トミ）を呼び寄せ、生家の寺で僧職に就いて結婚までする。これをみて、丹羽の面従腹背の心の内を知らない父や檀家の人たちは、これで十八代の血統となる崇願寺の後継者ができたと安堵する。しかし、約2年後、家出同然に寺を棄ててしまうのである。何も、家出までして寺を棄てなくても、小説は書けると思うが、文雄は出来なかったのである。

（中略）

これは、父と祖母の関係が、現実解る年ごろになり、その噂を耳にするころには、冷めた反抗心が鬱積したと考えられる。少なくとも高校に入学したころには、いやもつと早いかもしれないが、寺を継ぐことを拒否する心が芽ばえたのであろう。

と、述べている。世間では、僧籍に身をおきながら、文学や教育の場で活躍している多くの職業人がみられることから推察すると、職業としての住職と小説家の両立（兼業）はさほど困難であるとは思えないにもかかわらず、丹羽が僧職を捨て、四日市を離れたのは、この異常な家庭環境の影響が、特に大きかったものと判断される。

ここに、丹羽の天性での才能と異常な家庭環境が專業の小説家への動機となったと語られている。

ここで、何故、父が龍谷大学（真宗西本願寺派）や大谷大学（真宗東本願寺派）といった仏教系への進学以外は許さないといった強い態度をとれなかったのかに関し、小泉譲は、『丹羽文雄文学全集の月報』で、次のように述べている。^④

文雄の早稲田志望は教開にとつては内に爆弾を抱えている心境に近かつたのではなからうか。印度哲学専攻を口実にする息子をわずかな救いとして東京に送りだした父教開の心底は、あるいは文雄から母をもぎとつたことへの贖罪にも似た不愍のからむ愛情であつたかもしれない。そのことがなければ崇願寺のためにも檀家への立場からいつても教開は龍谷大学が大谷大学を丹羽にきびしく押しつけたであろう。決して早稲田大学を選ぶ息子のわがままな許しはしなかつたであろう。

ここには、父と祖母の不倫関係から生じた息子に対する心の弱みが大きく影を落としていることが伺われる。

実父は、生母家出の四年後、一九一二年（明治四五年）、田中はまと再婚し、のちに文雄廃嫡後の崇願寺を継承する房雄はじめ、異母弟妹が生れるが、丹羽本人は、母が違うことから家族団欒から浮いた形となる。

丹羽は、一九三六年（昭和二年）、片岡トミと離別後、太田綾子と、正式に結婚し、同年三月、長女桂子が誕生し、翌年六月、長男直樹が生れる。

一九五七年（昭和三二年）、長女桂子は、本田隆男と結婚し、京都での生活ののち、アメリカに在住するようになる。一九六二年（昭和三七年二月）、長男直樹は、アメリカで、ベアテ・フィッシャーと国際結婚する。

この時、長男直樹の国際結婚に対して、丹羽が、どのような感情を抱いたかに関しては、随筆「親鸞紀行」の中の「善鸞義絶事件」の項で、自分の体験を次のように語っている。^⑤

義絶はしたものの、親鸞の心の内では死ぬまでわが子善鸞のことが忘れられなかつたにちがいないのである。

義絶といえ、私にも体験がある。生家の崇願寺をとり出した私は、廃嫡処分を受けた。しかし、その当時は父のいかりや悲しみや絶望を、それほど感じなかった。自分のことが中心であった。後年私は息子をアメリカに留学させたが、まちがっても外人女と結婚するなど固くいい含めておいたのだが、ドイツ系のアメリカ娘と結婚することになった。このことは小説「有情」にくわしく書いてあるので、ここでは省略する。息子に叛かれてみて、私はその時になって寺をとり出した当時のわが子に対する父親の心中がよく判った。私は息子に対して何もいえなくなった。

「まちがっても外人女と結婚するなど固くいい含め……」という言葉からわかるように、丹羽自身、国際結婚に對して、強い拒否感をもっていたことが明らかであり、その思いが息子によって、裏切られたことがきっかけとなって、自分がかつて廃嫡された当時の父親の気持への覚醒が語られている。

このように、宗教的テーマを追究してきた作家といわれる源泉には、生家が親鸞を宗祖とする浄土真宗の寺院であったこと、さらに、祖母と実父（養子）の不倫と生母の家出という家庭内の修羅場を体験したことの二つの運命的な出会いが大きく影響していることが推察できる。

二 作品にみる親子間の断絶からの覚醒

この作品は、昭和三七年、姉、弟の二人の子供をもつ丹羽自身の一人息子（直樹）の国際結婚を題材に、発表されたものである。その作品構成を、前章の丹羽の実生活と比較すると、家族構成や本人や直樹の年齢（五七歳・二四歳）や本人の職業（小説家）、子供たち（実名に近い名前）の海外生活、直樹の結婚相手がドイツ系の娘であることなど、

実生活と極めて近似しており、多くの点で、自伝性の強いことがわかる。

同時に、丹羽自身、「自伝についての考察―創作ノート」で、「書かれていることがみな事実というのではない。いわゆる可能性を描いている。事実の上に可能性を加えた」と、厳密な意味での私小説ではないと述べており、実生活から乖離した虚構性の包含も示唆している。

以下、作品の文脈に従って、考察を進める。

(一) 長男の国際結婚への反発と動揺

アメリカに在住の娘(圭子)から、手紙が届き、息子(直、二四歳の大学生)がドイツ娘と友情以上の交際をしており、今のうちに注意しないと、取り返しがつかなくなる旨、伝えてくる。

続いて、二人は婚約したとの知らせが来る。息子は、二年間の留学後、日本に帰ってくるという約束で行ったのに、大学もやめ、働いており、もう日本には帰らないつもりであるということを知る。作中の「私」は、これを知り、激怒する。

妻もこの話を聞いて、同様に、強い拒絶反応を示すとともに、留学の目的について、次のように語る。

「絶対に許さない。青い目の子供なんて、まっ平です」「直が性格的に独立精神がつよく、ねばりづよいというのなら、今度の場合にもまた考え方はちがう。おばあさん子で育ち、ねばりがなく、感情的で、中途半端、性根がないからこそ、私たちはあの子に気をつかっているのだ。性格的な欠陥を親の手で、おぎなってやれる限度をおぎなってやりたいために、アメリカの大学までやったのだ」

ここに込められた妻の心情には、やさしくて、思いやりのある息子が、その性格の弱さから、自己主張が強いとい

われる外人女から受けるであろう、さまざまな苦勞を避けてやりたいという母親らしい思いやりの親心が伺われる。一般論としては、異国で、外国人を配偶者として、家庭生活を営む上での実践面での困難さに着目しても、次のような事柄が想起される。

まず、言葉の問題をはじめ、考え方の背景にある文化の違い、食べ物の好み、食生活の違いがあり、さらに、生活の基盤・仕事・家・医療・学校・保険・子育てなど、生活と密着している部分の全てを外国で、しかも違う言語で対応していかざるを得ないことを受け入れる覚悟が求められることである。

さらに、作品中には、他に、国際結婚の失敗として、母子間の生涯に及ぶ断絶例が二、三引用されており、いずれも父親に比べ、病身になってしまうなど、母親の嘆きの方が強いように見受けられる。ここには、見ず知らずの異国人に分身を奪われるといった感情からくる、女性特有の母性本能のようなものが作用しているのではないかと思われる。今回の直の婚約相手は、ドイツからの難民の娘であり、父親は戦死したので、母一人、娘二人の姉であり、直より一歳年上であるという情報が、娘婿の俊太から届く。さらに、直からも、裕福ではないが、二人で努力して、人生を築いていくので、ぜひ、この結婚を認めてほしい旨の手紙が届く。

そして、「私」は、最大級のおどかしとして、「お前を廃嫡する」、「一切の援助は切る」、「姉の家へ出入りするな」、「僅か二年間両親との約束を守れないような人間にはあいそがつかた」など、不心得な息子を容赦なく、たき斬る内容の手紙を送る。

この時の「私」の気持は、ひたすら直の国際結婚を断念させたい願いから発したものであり、あくまでも、本気ではなく、おどかしのつもりであったのだが、直はそのように受け取らず、父子の決定的な破綻の原因になってしまう。妻は、心労から病気になる。

これに対する息子からの返事には、次のように書かれていた。「お父さんは、決してひとのあやまちが許せない人間です。自分自身に対しても、きびしすぎる性格です。いままで、物質的には、恵まれても、一度も精神的には愛されたことはない。ほのぼのとしたあたたかい感情は一度も味わうことがなかった。息子は死んだものと諦めてもらっても結構です。ぼくもまた、親はなかったものと思います」、「お父さんの手紙は、いったいどう形容すればよいのでしょうか。あれが自分のほんとうの子にあたえるものでしょうか。わが子に向かって書ける文章でしょうか」

これを読んで、本人は、自分なりに愛情を注いできたのに、こんな風に息子から思われていたことを知り、心はずたずたになり、絶望する。

ここに、夫婦そろって、国際結婚に猛烈に反発し、妻も病気になってしまふほどに、衝撃を受ける姿が描かれている。息子が特に罪を犯しているわけではないのに、なぜ、こんなにも国際結婚を忌避するのか、ここには、近代化が未発達の前日本古来の結婚観が背景にあり、異文化を拒絶する社会風潮が大きく影響していたものと推察される。

(二) 本人の過去への回顧

現在五七歳となっている「私」は、息子との断絶を契機に、三〇年前に、廃嫡されるに至った自分の言動を振り返り、相手の立場になって、人の気持を察するという人間としての対人意識の困難さとその欠如に対して、悔恨の念に苦しむ。

先ず、「私」が、小説家になった当時の父（直からみて祖父）や檀家の願いに対する背信行為について次のように想起する。

ア、檀徒の願いへの背信

「せっかく檀徒がお金を出すのやさかい、よろこんで勉強してもらえるような大学にいつてもらおうことを、わしらは願うとのや。坊ちゃんは坊主大学へいくくらいなら、どこへもいきとうないというところが、それではわしらが困るのや。崇願寺の檀徒はいつたい何をしとのやと世間で笑われるだけや。わしらは立派なあととりがほしい。わしらの金で大学を卒業したご院さんがほしいのや。それがみんなのぞみやて」

と、言われ、ここでは、表面的には、意向に沿う約束をする。

また、戦争で焼失した崇願寺の落慶式の時、僧職を捨てた「私」に対して、昔の世話方の一人があらわれて、次のような非難の言葉を浴びる。

「あんたが家出したときには、ほんとうにはらがたつた。殺してやりたいくらいにくかった」

この言葉を、刑をいいわたされる罪人のように息をのんで聞き、私の家出は決してゆるされていないことを思い知らされる。当時の自分の心情をふりかえると、檀家の学費負担の苦労や、そのために、父が檀家まいりで頭を下げどおしであったことはつゆ知らず、寺側が受けるべき当然の権利のように心得ていた。

と述べ、今になって、檀徒への背信に思いを馳せる。

イ、父の願いへの背信

先の実生活のところで、小泉が述べたように、父は息子の進学先の選択にあたって、強い態度をとれなかった、その背景には、自分と祖母との不義の結果、生母の家出という形で、母子の仲を割ってしまったことに対する贖罪の気持ちが生作用し、その償いを意識したために、苦渋ながら、息子の願いを優先させてしまったのではないかと評されているが、作品においても、息子の廃嫡に伴い、自業自得とはいえ、父が檀家との間で、どんなにつらい思いを余儀な

くされたかについて、次のように述べている。

檀徒に対して父は何と云ってあやまったのか。はたして父にあやまれる語彙があったらうか。檀家は六年間ありあまつていた金を出していたのではない。私の行為は詐欺だった。大学を卒業すれば寺におさまるということを約束して、出資してもらったのである。檀家は私を信じていた。私を信用していたことは、父を信じていたこととおなじである。檀徒に責められ、自分が罪を犯したように父はおそれ、おののいたであらう。父にはひと言の弁解もゆるされなかった。坊主にあるまじき背信を責めたてて檀徒がひきあげた本堂で、父はうなだれたまま身動きもせずにいたにちがいない。父はだれの前にも顔向けがならなかったのだ。

ここに、心に負い目をもつことが、その後の人生をどんなに狂わせてしまうかという人間の心の弱さを示しているものと推察される。

直がドイツ娘と婚約したというだけで、私はいきり立ち、逆上した手紙をたたきつけた。しかし、三十年前の父の体験といまの私の体験がくらべものになるだらうか。はつきりしていることは、直が手紙に書いているように本人は悪いことをしているのではない。が、私ののは詐欺的行動であった。私は三十年昔に大それた罪を犯した。その仕返しをいまうけているのだ。罰があつたのだと因果応報的に考えることはできなかった。そんな風に思いたくなかった。直が私にあたえた一撃は、三十年前の私自身の裏切りをよみがえらせた。因果応報という考え方が心にかばないのではなかった。しかし、私はその考え方をしりぞけた。それとこれとはちがうのだと思いたかった。が、直の父批判は私のわがままな心を真向きにさせてくれた。私は三十年昔の父の心と真向きになることができた。これまでのやり方とはまったくちがった角度から、父の心と向きあった。私は初めてのように父の心を感じた。三十年前の父の苦悩が、いまようやく判ったという気がした。

(中略)

父の嘆きと私の嘆きとは、くらべものにならない。泣くに泣けないと形容したところで、父の三十年昔の衝撃にくらべたならば、ものの数ではなかった。この比較が、私のからだの中の毒気をひきぬいてしまった。

この文脈は、人の心の痛みを知るといふ、円滑な人間関係に不可欠と思われるようなことであっても、自分が被害者の立場になるような類似体験をしなければ気づかないといった、煩惱に支配された自己中心性からくる人間の心の身勝手さを示しているものと推察される。

三 親鸞思想への傾斜

(一) 「あやまち」への人間分析

先に述べたように、国際結婚は断じて許さないとする「私」からの手紙に対して、直からの返信の中で、冒頭に「お父さんは、決してひとのあやまちが許せない人間です」との非難を受ける。

ここで、直が自覚している「あやまち」とは何か、それは、次のような妻との会話から、約束を破ったという背信行為(裏切り)であると判断される。

初めて、ドイツ娘との交際を知ったとき、「あの子は、アメリカへ勉強にいったのですよ。そんな外国の娘と恋愛するためではありません。何のためにお金をおくっているのですか」と妻は話し、また、アメリカへの出発にあたっては、「青い目の妻といっしょに羽田にかえるといふことの絶対にならないように……」「そんな馬鹿なことはいけませんよ。そんなことを想像して心配するなんて、ナンセンスだ」と、直自身が答えており、さらに「青い目の子供なんて、

まっ平です。まさかと思っていたことが事実になりました。あれほど固く約束しておきながら、母親をだますなんて……」

ここに、明らかな、母親に対する背信が描写されており、約束を反故にしたことへの直自身の罪意識が語られている。ここで、丹羽は親鸞語録を初めて、次のように引用する。

「人間はあやまちを犯さずには生きられない」と絶望的に言った言葉に目覚めた。この言葉は、親鸞が八六歳のとき、「正像末和讃」にある愚禿悲歎懷の中に、書いたものである。親鸞は、「教行信証」を書いてから、三十年もたっているが、親鸞は、自分の心を反省するたびに悲嘆しいではいられなかったのだ。すでに如来の境地に達しているにもかかわらず、「浄土真宗に帰すれども、真実の心はありがたし、虚仮不実のこの身には、清浄の心もさらになし」と告白し、「悪性さらにやめがたし、こころは蛇蝎のごとくなり、修善も雑毒なるゆえに、虚仮の行とぞなづけたる」「無慚無愧のこの身にて、まことのこころはなけれども……」と正直にいつている。

「君の指摘を全面的に否定するのではない。ときにはひとのあやまちが許せないお父さんであることもある。しかし、お父さんは、ゆるすもゆるさぬもない。みんなおなじ人間ではないか、親鸞が正客としてあてにしてくれる悪人ではないかと、つねにそう反省したいと心がけているのだ。その心だけはみとめてほしいのだ」と、心の中で語りかけることにより、親鸞思想に感化された、「あやまち」を許容する姿勢が述べられている。

ここで、本稿の主題である「あやまち」とは何かについて、丹羽作品の「親鸞とその妻」の一節を引用しておきたい。^①

「…私のいうあやまちはしくじりという意味ではない。ひとをそねんだり、ひとをさげすんだり、虐めたり、争ったりすることだよ。ひとより自分だけが楽をしたいとか、うまいものを食べたいとか、ひとの畠より自分の畠の作物がよく出来るように願ったりすることが、あやまちだ。つまりは自分の欲望をおしとおすために、あや

まちが起こるのだよ。人間は誰にも欲望がある。人間は自分の欲望のままにうごかされていると言ってもよい。そしてその欲望には、いつでもその人が中心となっている。自己中心の欲のために、人間はいつになっても心の安らかさは得られない。欲望をもちつづけるかぎり、人間は苦しまなければならないように出来ている。人間がこの世に生れてきたのは、苦しむためだというのも、何もよそから自分が虐められて、苦しむというものではない。そういうこともしばしばあるだろうけれど、それよりも人間は自分自身の欲望のために苦しむことの方が多くて、ふかいのだよ」

と、親鸞が不遇の女性相手に語る場面があり、あやまちとは、煩惱を発露とする、最も人間的なふるまいであり、丹羽は、罪の軽重を枠外のものとして、論じている。

(二) 人生観の転向

さらに、人間社会において、人はどのような運命をどのように、辿るか、あるいは辿らざるをえないのかについて、丹羽自身の思いを、次のように語っている。

この世には、手の出しようなない途方もない大きな力があり、それで人間があやつられているという考えが私にはあった。どこからそれが来るのかわからない。抵抗のしようのない力である。この世には人間以外の何ものかがある。人間のすべてをひっくりかえしたこの宇宙というものは、内在的意思によって支配され、その内在的意思は無意識であるという宿命論である。もしこの宿命論が決定的なものならば、抵抗のしようがない。勝手にしてくれというほかないのだ。

(中略)

自然法爾は親鸞が八十六のときに書いたものだが、その中から宗教的な文字と宗教的な解釈の部分を抜いてしまつと、人間の実際の生き方がしめされたものになる。人間の行動については、よかろうとも悪かろうとも思わず、自然にまかせてゆけというのだ。親鸞はこの自然を如来のはからいと解した。大悲の如来という意志をもった人格的なものとして親鸞はうけとつたのだ。人格的なものでありながら、それは形のないもの、形がないからこそ自然だといった。親鸞はつとめて形で如来を考えさせまいとした。仏とは最高の智慧のはたらきであるからだ。人間のなかの智慧の自然のはたらきが如来の本体であるといい、弥陀仏はそれを如来だと知らせるためのものであると説いた。そして、私は直の結婚をみとめたのではなかった。ゆるしたのではない。私の力のおよばない世界の出来事と思つたのだ。そう考えることで、私の気持は平静になった。

と、親鸞の「人間の行動については、よかろうとも悪かろうとも思わず、自然にまかせておけというのだ」といった人間の心の狭隘さからの解放ともいえる文言を引用し、自力で煩悶することの苦悩からの離脱が、親鸞思想に覚醒することにより、齎されたという人生への新しい展開を述べている。

ま と め

この作品「有情」は、丹羽が長男直樹の国際結婚を題材に発表したものであり、その内容は、虚構性のない本人の随筆や知人たちの投稿からも明白なように、私生活での体験がそのまま投影されており、きわめて自伝性の強いものである。

そして、作品は、人間のあやまちを主題としてしていることから、時代を越えて、現代の人間社会にも通底する教訓や

警鐘を読みとることができ、意義深い作品であると判断される。

この作品で扱われている人間のあやまちという、人間の本性ともいえる命題について、その要点を検証してみると、次の三点が挙げられる。

(1) 先ず、本来、仏教系の大学に進学すべき立場にあった丹羽が早稲田大学に入学することを、なぜ、父が不承不承ながらも許したのか。本来なら、後継者となるよう、もつと厳しく、仏教系以外は絶対に許さないとといった態度をとれなかったのはなぜか、その背景には、自分と義母との不倫というあやまちがもとで、生母の家出という形で、丹羽と生母の間を割ってしまったことへの贖罪の気持が働き、不憫な思いが働いたためとされている。

このように、あやまちを犯し、心に弱みをもつ人間は、相手に対する負い目から、人生の重要な決断の場面で、とりかえしのつかない誤った判断を余儀なくされてしまうことがある。

(2) 次に、国際結婚に猛反対する父(ここでは、丹羽の立場)への息子からの予想外の強烈な反論に驚愕した父が、息子に叛かれた衝撃を受けたことがきっかけとなって、三〇年前、檀家から「わしらは立派なあととりがほしい。わしらの金で大学を卒業したご院さんがほしいのや。それがみんなのぞみやて」といった強い願いや、また、檀家に頭を下げながらの父の学費負担の並々ならぬ苦労には思いがいたらず、父の不倫に対する嫌悪感を優先して、寺院を離れたことにより、父や檀家に与えた裏切りの深さに、はじめて、気づくことができたことと述べている。

一方、具体的な言及はないが、小説家になったことに対して、強い背信意識を感じながらも、丹羽自身があやまちであったと認識し、後悔しているわけではない。しかし、もし、三〇年前、まわりの人達の気持を十分付度することができていれば、兼業の小説家という選択肢もあつたはずなのにと、今になって、内心では、あやまちに近い気持を内包しているのではなからうか。

この文脈は、人の心の痛みを知るといふ、円滑な人間関係に不可欠と思われるようなことであっても、自分が被害者の立場になるような類似体験をしなければ気づかないといった、煩惱に支配された自己中心性からくる人間の心の身勝手さを示しているものと推察される。

(3) 最後に、「人間はあやまちを犯さずには生ざられない」という親鸞の和讃に覚醒することにより、親との口約束を破棄したという息子の国際結婚に対して、憤っている自分の思慮不足に目覚め、「あやまち」を糾弾するのではなく、それを容認し、寛大な境地に達することにより、罪悪感や裏切りから受ける苦悩からの解放を得ることができたと述べている。

(注)

- ① 第一章「丹羽のおたちと私生活における体験」での経時的な流れについては、主として『丹羽文雄文藝事典』(二〇一三年三月、和泉書院)に収録された「伝記年譜」(二二五～二三三頁)による。
- ② 『XYZ235』「四日市の丹羽文雄さんの貌」(二〇一四年十二月、四日市文章集団「XYZ」一九頁)による。
- ③ 『XYZ235』「丹羽文雄論」(二〇一四年十二月、四日市文章集団「XYZ」三一頁)による。
- ④ 『丹羽文雄文学全集第四巻 月報12』(一九七五年四月、講談社)に収録された「評伝丹羽文雄(十二)」(六～七頁)による。
- ⑤ 『丹羽文雄文学全集第二十八巻 親鸞Ⅲ』(一九七六年八月、講談社)に収録された「親鸞紀行」(三三二頁)による。
- ⑥ 『丹羽文雄文学全集第二巻 鮎・太陽蝶』(一九七六年一月、講談社)に収録された「自叙伝についての考察―創作ノート」(三九四頁)による。
- ⑦ 『親鸞とその妻』三「越後時代」(昭和三四年六月、新潮社 二二～二三頁)による。

丹羽文雄「有情」にみる人間観(河合)

〔付記〕

本稿における作品引用は、『丹羽文雄集』現代日本の文学27（平成四五年六月、学習研究社）に、その他の引用文献は、それぞれ注記したものによる。

（かわい しげよし／皇學館大学大学院博士後期課程）